

令和6年度 第1回芦屋市立美術博物館協議会 会議録

日 時	令和6年11月8日（金）10:00～12:00
場 所	芦屋市立美術博物館 講義室
出 席 者	会 長 藪田 貫 副会長 岡 泰正 委 員 飯尾 由貴子 委 員 梶本 和男 委 員 若林 七奈美 委 員 池田 久美子 委 員 安部 太一郎 委 員 興津 厚志 （芦屋市立美術博物館指定管理者） 館 長 石井 茂（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 山本 剛史（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 大槻 晃実 学芸員 川原 百合恵 株式会社小学館集英社プロダクション 岩川 晋子 （事務局） 国際文化推進室長 田嶋 修 国際文化推進課係長 中村 達也 国際文化推進課主査 竹村 忠洋 国際文化推進課会計年度任用職員 平沼 真由美
事 務 局	国際文化推進課
会議の公開	■ 公開
傍 聴 者 数	0 人

1 会議次第

- （1）開会
- （2）議題
 - 1）令和6年度上半期事業報告について
 - 2）令和6年度下半期事業計画について
- （3）その他
- （4）閉会

2 提出資料

会議次第

委員名簿

- ・資料1 2024年度 展覧会動員実績
- ・資料2 入館者数内訳
- ・資料3 2024年度事業報告（4/1～10/21）
- ・資料4－1 展覧会アンケート集計結果
- ・資料4－2 展覧会アンケート意見集計
- ・資料5 アンケート集計まとめ
- ・資料6 広報活動について
- ・資料7 広報記録
- ・資料8 フォロワー数の変遷
- ・資料9 2024年度 事業計画書
- ・資料10 2024年度 事業計画書 詳細
- ・資料11 動員数推移

3 審議内容

（藪田会長）

それでは、本日の次第に従いまして、ただ今から議事に入ります。

はじめに、議題（1）「令和6年度上半期事業報告」について、事務局より説明をお願いします。

（事務局：竹村）

議題（1）「令和6年度上半期事業報告」については、石井館長から説明させていただきます。

＜石井館長が説明（資料1～8について）＞

（藪田会長）

ただ今事務局より説明のありました「令和6年度事業報告」について、何かご意見・ご質問などございましたら、お願いします。

（安部委員）

芦屋市立精道小学校の安部と申します。よろしくお願ひいたします。私も市内に住んでおりましてコレクション展、信濃橋洋画研究所展、今井祝雄展、すべて見学しています。普段から学芸員の二人とも学校と連携をさせていただいており、その準備段階から色々なお話を聞かせて頂いております。展覧会はすごく見応えがあつて、かなりキャプションとか資料とか、まとめられて展示も見やすかったという印象がどの展覧会にもありました。見学者のアンケートを見せていただきましたが、その中で、資料5の「8 どなたと」の子ども連れの方はイベントには来るが、展覧会へは来ない傾向。他館が実施しているような「親子デー」や赤ちゃん・幼児がいる人が来ても安心というような日を展覧会によっては設定することを検討したい、と書かれています。来られた方のアンケート、資料4－2の⑬コレクション展40代女性が子どもをよく連れてくるので、子どもに分かりやすい解説があると分かりやすいです。と書かれています。見させていただいて印象に残るのが、かなり資料がたくさんありますが、子ども向

けにワークシートや、難しい言葉も多いので、もう少し分かりやすく噛み砕いたミニ解説を付けていただけたらよかったです。子どもは作品を通して色々な形から見て自分なりに感じる事も多いし、それはそれで良いと思うのですが、家族でせっかく見に来られることがあるので、ワークシート、ゲーム方式でここにこう書けるよとか、こういう意図で作者が作ったんだよと分かりやすいものがもうちょっとあれば良いなと感じました。ここに書いてないことですが、入口の所に掲示板があつて、他館の展覧会のチラシ等が置いてあるんですけど、そこに幼稚園・保育園・こども園の取り組みの作品が展示されていますが、設置場所が目立たない印象があります。せっかく幼稚園、保育所、こども園との取り組みの作品を飾っていると思いますので、ワークショップなのかもしれませんが、その作品をもうちょっと目立つ所に展示された方が、見に来られた親御さんたちもせっかく美術博物館に飾ってもらえているのだからという気持ちもあると思うので、場所が入口のドアのそばというのは、可哀そうだと感じています。それぞれの展覧会を見させていただいて、私も刺激を受けるような内容もたくさんあつて、学校の図工、美術の授業でこういった子どもバージョンでの授業が出来るのではないかという考え方で見せていただいたりもしています。準備段階から含めて、普段からお話を学芸員さん二人からお話を聞いていますので、その大変な展示準備とかが伝わる展覧会でした。先ほど申し上げたキャプションとかワークシート、そういったものがもう少し工夫されていたらよかったですのかなと思います。

(岡副会長)

私も2つの美術館の館長をしておりまして、美術館をどのように運営するかを毎日、学芸員、館の者、指導主事とも調整していくんですね。色んなここに書かれている今ご報告のあった試みというのは、私たちもやっていることですし、それだけやっても入館者に響いてこないというのは、どうということかなとも思うんです。つまりこれがものすごく本格的にやっても、来館者につながらないものはつながらない、予想外にすごく当たる展覧会、展覧会はその時流に合うかヒットするか、本当にちょっとしたことで、ヒットしたりすることがある。芦屋の展覧会を拝見しまして、信濃橋洋画研究所は非常に勉強になりましたし、非常に見応えがあつて、非常に素晴らしい展覧会でした。しかし、結果を見ると、それほど入館者が押すな押すなというわけでもなかったようですね。アンケートを見ると厳しい意見もありますし、美術館側の身になってみれば大変だと痛感します。その時どうすればよかったのかというのは、先ほど安部委員がおっしゃったような子ども向けのことは学芸員は出来ません。それは専門の人がやらないと、私たち学芸員が美術の知識を持って教えようというのは全然駄目なので、子どもにやるのは、喋りながら、子どもたちの考えを引き出していくということが大事なので、きっかけ作りなんです。造形の喜びみたいなものを与えるというきっかけ作り、気づきが大事だと思っております。それは専門の教員の先生と話をしないといけない、私の館は指導主事がやっています。今キーワードとしては、子どもの目線で見せるとかがトレンドであります。その中で、過去のことを今井祝雄先生は着想ということなので、それプラス前から言っていることですが、おそらく芦屋の美術、具体をくつつけても、高齢者の方が来られてもわからないと言うと思います。それは芦屋の美術の歴史として語るというのが美術館の使命なので、そこはやりながら、もうちょっと「口当たりが良い」ことも考えることが必要です。それから撮影について、著作権の問題がありますが、撮っていいよとそれがSNSに上がると、フィーバーする可能性があるんで、押すな押すなじゃない展覧会は撮影もさせるとかですね、ちょっと敷居を低くしていかないと今後の美術館は難しいです。良い展覧会をされていますので、それプラスどうしたら良いかということのジレンマを感じます。ここまでやっても入館者に響いてこないのはどうしてだっ

て思います。

（池田委員）

私は今まで美術博物館に観に行くことがあまりなかったのですが、近いとか、何かきっかけがないとなかなか来場しにくいです。安部委員がおっしゃったように子どもに分かりやすい解説があったら、一緒に楽しんで行こうかなと思います。小さい時から美術作品や文化財に触れていると興味をもてるのかなと思います。

（藪田会長）

このアンケートの中で同感されたことがありますか。就学児の子どもたちがお父さん、お母さんと一緒にという観点から見た時にいかがでしょうか。

（池田委員）

ワークショップなどがあれば楽しんで来ることができて、その時にせっかく来たから展覧会を見ようかなと思います。美術博物館はなかなか行かないから、ワークショップとかイベントがきっかけに行ってみようかなと思います。ただし、イベントだけに来てしまう人がいるので、難しいと思います。

（藪田会長）

ワークショップと展覧会のハードルは違いますからね。

（池田委員）

きっかけがあった方が、その時に展覧会を見ようかなと思います。なかなか何とか展だけでは、その内容がどんなのかなと思っても、なかなかすぐには来れません。

（興津委員）

この館の動員数としては、何人ぐらいを目指しているのでしょうか。展覧会の動員数として、あしやつくるばではなく、展覧会に来ていただく人として、この館の規模と立地で何人ぐらいを目指しているのでしょうか。そのために色々広報活動をされている中で、一番効果のあった広報とか、これから力をいれていきたい広報とかは、どういうものをお考えなのでしょうか。アンケートとか、今回出して頂いて分かりやすくなりましたが、それを踏まえて、どういう行動をとろうと、何を目標にどういう行動をとるのか、もう少しお話したいと思います。館の利用者が少ないとか、認知が少ないとなると、今後、存在意義がなくなっていく（芦屋市の財政によっては今後の館の継続が困難になる）可能性が高くなるだけなので、出来たら、きちんとターゲット、目標、あるいはこういう館を目指しているのだというのを明らかにする必要があると思います。他館の良い所を取り込んで、こういうことをやっていきたいというところをもう少し教えていただけると、今後もしっかりと博物館として残っていくのだ、安心、と思えるので教えていただきたいです。

（事務局：田嶋室長）

3万人前後が目標とっております。指定管理者が毎年度事業計画を提出していただいております、年間の展覧会の回数と入館予定者数を提示し、その回数の想定の入館者数が妥当なのかを確認

しています。昨年度は2万8千人程度来館していただいております、計画では2万9千人で予定されていたと思いますが、それが若干下回ったというのが前回の決算の数字でした。やはり本市の規模で、どういう美術博物館であってほしいということですが、先ほど岡副会長がおっしゃっていましたが、なんでもかんでも受けを狙うという事ではなく、芦屋ゆかりの作家、もしくは美術博物館で所蔵している具体美術

であったりというところを出しながら、それ以外の展覧会も合間に開催して、皆さんに見ていただくことを考えております。それとプラスアルファとして、文化ゾーンであるこの美術博物館と谷崎潤一郎記念館、図書館が横並びで立地しており、そういったところを含めまして、皆さんに足を運んでいただきたく思っております。そういう点からいきますと、先ほどの市内にお住まいであつてもなかなか足を運んで頂けないというご意見もありましたが、例えば前庭で開催します「あしやつくるば」や、そのようなイベントを皮切りに地元の方が来やすい場所ということから切り込んで、その日は観覧料を無料にするなどして、知っていただくことからやっていくという風に目的を考えています。あとは、広報なんですけど、岡副会長がおっしゃっていましたが、やはり広報でどれが当たりなのかというのはなかなか難しい。今のところ色んなSNSの特性を生かしてやっておりますけども、先ほどもおっしゃっていましたが、それが作品と合致するかということが、特別展が皆さんの興味を引く特別展か、難しく思っています。引き続き、いろいろと研究しながら、広報に努めてまいります。

(梶本委員)

資料6を見ていますと、広報活動を書いておられますが、字が小さいです。読みづらいのもう少し大きくしてほしいです。前からお願いしたいと思っておりますのが、1番のプレスリリース、新聞社へのリリースのお願いをしておられますが、美術とか博物館とかに関心ある人がご覧になる記事のコーナーになんとか載せてもらえないかと思っています。

(事務局：田嶋室長)

本市には記者クラブがあり、市政記者といって芦屋市の担当の私もよく知っている記者がいます。今、ご意見をいただきましたので附属機関から意見がありましたということを改めて、市政記者に伝えてたいと思います。

(梶本委員)

ということは、新聞社はその時々テーマをみながら、載せる載せないの判断をしているということですね。

(戴田会長)

そうだと思います。枠が決まっているので。

(若林委員)

山の手に住んでいる市民は、美術博物館にあまり足を運ぶことがない。若者はインスタ等を見ますが、一番見るのはTikTokだと思います。ショート動画をよく見るので、そういうのが合うのか合わないのかは別として、多くの人に見てほしいというのであれば、一つの手かなと思います。

あと、アンケートを見ていると字が小さいとか、分かりにくいという声がたくさんあるので、そ

の辺はちょっと改善されたらいいという事と、ここは犬の入場は不可なんですかね。散歩コースは無理ですよ。この辺の人が犬のお散歩で、リードを引っかけて待たせる所があれば、中にちょっと入ってお散歩ついでに見て、お散歩に戻ろうかなと、そういう些細な事です、足を運びやすい。子どもだけではなくて、そういう方も近所の人が来やすい環境を作れたらどうなのかと思いました。

(藪田会長)

山の手の市民の中には、バスではなく車で来館される方もおられると思いますが、市としての対応はいかがですか。

(事務局：田嶋室長)

車は駐車場を1時間無料にしています。

(飯尾委員)

いつもながら、地に足のついた展覧会と研究活動をされていて敬意を表したいと思います。入館者数に関しては、定番になっている庭イベントがあるということで、庭イベントに来られた方を展覧会に取り込まない手はないと思うので、紐づけて、必ず展覧会を見て帰っていただくという仕組みを作られたら良いと思いました。

資料1の観覧者数の合計ですが、その他のところ、例えば観覧者数合計が具体美術協会展ですが、2,972人、その他の所に庭イベントの参加者が入るのかなと理解しています。この方々は展覧会を観覧されていませんか。いますか。

(石井館長)

庭イベントに参加されている方は、ご覧になっていない。もちろんワークショップに参加されている方は通常は入館料をいただいておりますので、ご覧になっています。大きなイベントのつくるばとかは、当日は無料にされていて、出来るだけ展覧会も見えていただくように努めています。

(飯尾委員)

来たお客さんは離さないということで、出来れば、ぜひ展覧会もどうにか見てもらう仕組みを作ると、もともと見る気がなくても自然に触れていくとちょっとした体験になるし、記憶にも残ると思うので、せっかくこういうイベントもやっておられますし、ここの芝生のお庭は、本当に素晴らしい資源だと思いますので、来たお客さんを展覧会に必ず捕まえてぜひ見てもらうという仕組みを作られた良いと思いました。

それから広報に関しては、ダイレクトメールも相当数送っておられると思いますが、これは郵便料金も値上がりして、今からどんどん紙の媒体というのは難しくなってくると思いますので、Web配信とのバランスがこれから課題だと、これは感想ですが思いました。小学校の児童向けチラシですが、これ芦屋市内の学校に配っているとことで良い取り組みだと思います。例えば神戸市は、チラシ配布ではなく、すぐーるという保護者が登録するアプリ、そこに色々な市の事業を配信しているという仕組みがあるそうで、おそらく越境してそういう情報を流せると思うので、そういうWeb配信もご利用されたら良いのかなと思いました。

(岡副会長)

美術館が生き残ろうとするのは、ものすごく大変です。つまりルーヴル美術館のように具象的な作品を観るのを目的として来たような人たちに対しては、現代美術というのは期待を裏切るんです。油絵というのはタブローになっている、そういうもの、美術館の美術鑑賞というイメージはファインアートを観ることを期待しています。しかし、芦屋市立美術博物館は、そもそもモダンアートのために作られているようなところがあるので、美術館として生き残っていこうとすると、歴史博物館としての展示をもう少し強調する、少しずつ替えて、あとは新しいコンセプトで具象的なものも出していく。福田眉仙にしてもしかり、芦屋ゆかりの伊勢物語までさかのぼる作品がありますので、そういうコーナーをもっと大事に考えて芦屋の歴史を考えるようにされたい、それは博物館的なものです。美術館的なものは、信濃橋洋画研究所というテーマがありますので、大阪の事ですけど大切になさって、別に伊藤継郎先生は芦屋にお住まいで、私昔一緒させていただいて何度もお話したことがあったのですが、継郎先生をたくさん持ちだし、具体美術ともつながっていきます。信濃橋洋画研究所の展覧会の時に、美術博物館が所蔵のもので本当に良い作品—マスターピースがあるという事を再確認しました。先人がたくさん集めてくれているものは非常に良い目利きで筋が良いものがたくさんあり、随分感心したのです。そういうものを出さない手はないと思います。信濃橋洋画研究所は大事にして、田村孝之介にしても芦屋ゆかりで、つまり小出檜重の系列で位置付けられるというのは、一つの柱だと思うので、具体美術に寄りかかるだけではなくて、こういう歴史をもっと大事にされて、洋画に関しては耐久性があるので、本当にモダンアートを観た人たちがここでちゃんと具象絵画も観たなということができるようにすごく良い素材を掘られたと思うので、所蔵もあるので、こういうものを普通に美術館として応接間として出すということがあれば、満足度が高くなると思います。そうしたらふらっと来て観て、それでまた、そこに今月の一点とか、芦屋の方の応接間という形での生き方を模索されたいかがかと思っています。思い切ってキティちゃんをやろうとか色々トレンドのことをやって入館者を促進させるのは勤務する館ですけど、入らなくてもやらないといけないというブランドなんですよね。そういう生き方しか美術館は出来ないのです。それと教育ですよ、子どものためにということがなくなってしまうと、受け入れ施設がなくなりますから、寄贈だって、そういう出すところがあるから受け入れる訳で、存在意義のアピールを自分でやっていかないと、はいらないからと仕方ないと、誰も情状酌量で観てくれないです。

(興津委員)

先ほど飯尾委員が言われたあしやつくるばのことで、私はいつも来ているんですけど、博物館に4入館される人は少ないです。ただ、アンケートを見ているとボランティアの方が解説してまわっていたとか、そういうのは好感触ですけど、私が知らないだけかもしれませんが、あしやつくるばの時は単に無料なだけであって、解説があるとか、子どもたちを連れている人に、子どもたちに分かるようにやるとか、そういうことはされてなかったと思うので、もしよろしければ、子どもたちがたくさん来ている時に、子どもたちを連れている人たちにそういう解説をするとか、もうちょっと分かりやすいことをやるとか、そういう取り組みはやられた方が良いと思います。いつ来ても私一人ぐらいしか観てないので、とにかく人が来てくれたら良いと思います。もう一つは今の市長は、情報発信力が高く SNS などで非常にたくさん発信されていますので、こういういい方は失礼ですけど、もう少し市長を活用されたらどうなのかなと思います。

(藪田会長)

私の方から一つだけ、入館料がその都度違いますよね。入館料が違うという事と動員数というのは、どういう判断をされているのか聞かせていただきたい。

(石井館長)

常設展は 300 円になっていますが、特別展は 300 円ではできないので、その都度市に申請をして入館料を設定しています。コロナ後ですが、かなり経費が上がっていますし、10 月から郵便料金が上がるなど色んなものが上がっていて、周辺ではかなり入館料が上がっている中で、その辺の様子を見ながら、うちとしては、このくらいかと考えてやっています。もちろん損益上の事もありますので、やはり赤字になってはいけないので、そういったところをみながら、どうにか赤字にならずに収支調整をしながら運営出来るようにとところで決めて、黒字であれば、お金がかからないから、少し落とすとか、お金がかかるなら上げるとか、上限には 1,000 円ぐらいのところで設定しています。ただ、高くないように努力しながら設定しております。

(藪田会長)

博物館の全体的に上がってしまっていて、運送料を含めて経費が上がっていますので、1,000 円というのは、特別展では普通ですね。2,000 円、3,000 円とか、どんどん高くなっていつてしまっている状況があるので、そういう状況も前提として知っといていただいた方が、そのことも訴えられた方が良いと思います。やはり皆さんの生活の物価の値上がりと同じように博物館の物価も上がっているという事を発信された方が良いと思います。

それともう一つ、字が小さいというのは、うちの博物館でも常にアンケートを頂きますけど、これに革新的に成功しているのが正倉院展ですね。革新的に正倉院展は、展示品の横にキャプションを置かないですね。ガラスケースのところにまずキャプションを置いてある。ですからすごい大きな文字で書いてある。展示物はそこにある。普通、我々学芸員は、展示物のそばにキャプションを置こうとするから、どうしても遠くに離れてしまいますので、正倉院展で驚きました。展示物のそばでなく、ガラスケースに、まずこれを見てからじゃないと先に行けないという大きさに書いてある。そこまでしないと年齢差がありますし視力があるかもしれませんし、納得した大きさに読みたいと思います。あのやり方を採るかどうかは一般的に 100%正解かどうかわかりませんが、少なくとも正倉院展は高齢者の方がたくさん来られるという事なので、革新的に工夫されたと思います。そう考えると、見せ方という問題点はもっともっと検討する余地があると思います。

最後に館報に入れられると思うんですけど、その時、僕は担当された内部の自己評価、学芸員の評価をぜひ記録に残して欲しい。僕たちが言ったことを記録に残すのはいいですけど、担当した人がそれをどう理解していたとか、あるいは、それを自分として評価していくのかは、やはり大事だと思いますので、自分を失ってしまうという事は、博物館の事業を続ける上では弱くなってしまうので、ぜひ事業が一連終わった時点で、こういうアンケート含めて、反論するところは反論し、自分で認めるところは認めて、自己評価をぜひ館報のところに置いていただきたいと思います。

(事務局：竹村)

議題（２）令和 6 年度下半期事業計画についてお願いします。

<山本学芸員が説明（資料9～11について）>

（藪田会長）

何か質問ございますか。

（梶本委員）

今の資料10の裏面でのホールコンサート、これは入館料を払えば来れるわけですか。

（山本学芸員）

はい。そうです。こちらは、当日の入館券をご購入いただければ、どなたでも来ることは可能です。

（藪田委員）

他よろしいでしょうか。

次、議題3その他について、説明をお願いします

（事務局：竹村）

事務局からは、特にございません。

（藪田会長）

これで予定された議題は終わりましたが、他に何かありますか。

（安部委員）

学校教育という立場で出席させていただいたので、学校と美術博物館の学芸員を繋いで、授業をさせていただいているんです。学芸員の二人にも私がいた山手小学校で過去2年間連携しました。今年から赴任した精道小学校で12月にゲストティーチャーとして授業をしてもらう予定にしています。山手小学校には先ほど名前でもした伊藤継郎の作品がありますので、本物に触れて、子どもたちと一緒にこういう活動もさせてもらいました。この時も学芸員に伊藤継郎の技能とか表現方法を子どもたちに教えていただき、実際に自分たちで同じような表現をしようということで、カード作りをさせてもらいました。また、学芸員にはコラージュの授業で、タブレットを子どもたちは使っていますので、コラージュしてタブレットで写真を撮ろうと授業をさせていただきます。昨年は、学芸員に大きいビニールの作品でワークショップをさせていただきました。図工展というのがあるんですけど、その図工展で子どもたちと一緒に作った作品をこのように展示をしてもらっています。テーマが芦屋市のこれからの未来の街の絵をみんなで考えて、かなり長いんですけど、40m、50mのビニールにこのように作品を子どもたちとする取り組みをさせてもらっています。学芸員には、ヨドコウ迎賓館先ほどから名前が出ているんですけど、ヨドコウ迎賓館と小学校を繋ぐ活動をしているので、そこで子どもたちと作った作品をヨドコウ迎賓館にもこのように飾らせていただいています。美術博物館は山手の方の子どもは遠くてなかなかどこにあるかわからないとか、名前は知っているけど、行く機会がないということがよくあったんですけど、こうして学芸員にお越しいただいて、子どもたちと触れて、活動することで、ちょっと遠い、先ほど若林委員のお

話もありましたが、山の方は、なかなか来る機会がないので、美術博物館に来て、本物に触れるというつながりをもてたら良いなと思っています。今回12月に私精道小学校に異動したんですけど、そこで同じように取り組みをしていこうと思っています。少しでも子どもたちが美術博物館に足を運べるように、知ってもらうようにと思って、それも含めてこのような活動に学芸員のお二人に来ていただいて、授業をさせていただいています。こういう取り組みをしていることをお話させていただきました。

(藪田会長)

ちなみに何年生なんですか。

(安部委員)

このヨドコウ迎賓館は5年生です。ヨドコウ迎賓館の入口の柵の所なんですけど、こちらの大きいビニールの方は4年生です。伊藤継郎の鑑賞の方は4年生です。タブレットのコラージュの授業は5年生になります。今年は4年生、5年生で授業をする予定です。

(藪田会長)

大槻学芸員、川原学芸員、何かコメントはありますか。

(川原学芸員)

山手の方からの来館がなかなか難しいということ、安部委員との授業の開始は、当館が令和4年度の大規模改修の時に休館中に何か外に出ていく活動でできることがないかということで、安部委員とご相談を重ねさせていただいて、実現した経緯があります。それを次の年の令和5年度のヨドコウ迎賓館と繋いでいただいて、美術博物館と小学校、ヨドコウ迎賓館の三者を繋いでいただくようなことを安部委員にご相談にのっていただきながら、フレキシブルに行動していただいているので実現させていただいて、当館としてもすごく経験値にもなり有難い試みをしていただいたと思っています。今年度も継続してさせていただくのと安部委員がこれまでいらっしゃった山手小学校からも同様の出前授業が何かできなかと打診をいただいています。今後、当館は私たち二人の学芸員で美術の展覧会を年に2本から3本行っており、その中通常の業務がある中で、なかなか時間が思うように避けない側面もありますが、こういう風にお声がけいただくことを大事にしながら、少しでも広げていけたらなと活動しております。

(大槻学芸員)

安部委員からお声がけいただきまして、学校に何度か伺わせていただきまして、現場の雰囲気を感じさせていただきながら、色々と考えて実習させていただきました。子どもたちが町を歩いても、見たことある人と声をかけてくれたりとか、こちらだけでやっているのでは、まったく広がらない出会いとか、そういったものを頂けて有難い事ですし、安部委員が芦屋市立美術博物館としているという事を学校で告知くださることで、子どもたちと合わせて保護者の方にも美術博物館に目を向けるきっかけを頂けるので、すごく嬉しいことだと思っています。ヨドコウ迎賓館の取り組みが、大正時代の建物という事で、ステンドグラスに着想を得て、カラーセロハンでワークショップで物を作るという事をしていて、こちらで出来ることを持つていくのではなく、安部委員

と考えていくという事が、私たちにも学びがありまして、やっぱり安部委員の他にも山手小学校に就かれた先生からも一緒に何か出来ないかとお声を頂いておりまして、嬉しい限りなんです、ただ全部が全部出来ない、出来る限り対応したいと思います、広がりをもった活動をしていきたいと思っています。

(藪田会長)

ありがとうございました。

これで協議会を閉会します。

<閉会>